目安箱㉘

無力ということについて

上野昂志

戦争に行くなら、軍医になるのがいい。革命に参加するなら、後方に廻るのがいい。人を殺すなら、首斬り役人になるのがいい。英雄であって、しかも安全だ。

魯迅「小雑感」

このイロニカルな表現は、「急進的」な「大言壮語」を吐く「革命論者」を刺し貫いていることは当然だが、同時にそこには魯迅自らが紙の上に「無用」の文字を書きつらねることしかできないという痛切な無念の想いが重なっていたことだろう。しかし、その「文学、文学と騒いでも一番役に立たないもので」という重い認識が、表現においてはこのような一種激しいユーモアを持ち得ていることに、私たちは注意する必要がある。

言葉を書きつらね、しゃべりちらすことが、現実に対して無用ではないかという疑いにとりつかれない者は幸いだが、その疑いと無縁である限り彼は、紙の上に「タワ言」を並べるほかはないだろう。一方、その疑いにとりつかれた者は、時に沈黙し時にその悲劇的な状態を詠嘆する。だが、魯迅は違っていた。彼は自分の「無力」をはっきりと見つめながら、その「無力」に安んじてはいなかった。それが可能となった秘密は、このような表現のうちに見ることができる。悲劇的な状態は屈折して、ユーモラスな言葉の中にとりこまれる。そこにおいて、現実の「英雄」気取りの「論客」共は笑殺される。

このことは、私たちにとってたいへん示唆的であるといえるだろう。

私は、一昨年の四月から北爆拡大にいたたまれず「アメリカはベトナムから手をひけ」と書いたゼッケンを胸と背につけ朝晩通勤し、とうとう二年以上つづけてしまいました。

こんなことをしているので、ひと一倍神経過敏なのかもしれませんが、最近のベトナム戦争反対の声は、一時より弱まった感じがしてなりません。物価上昇、交通事故、進学競争、住宅難、そのうえ労働強化でつかれた体で、ベトナム戦争という難問題を本気で考えるのは確かにわずらわしいことです。

ベトナム戦争ではエスカレーションという言葉がよく使われていますが、私たちにとって、もっとも恐しいことは、私たち自身の頭の中の無力感〝あきらめの思想〟のエスカレーションではないでしょうか。

朝日新聞4月13日〝声〟欄

この「無力感」は単に日本人は熱しやすく冷めやすいからといったようなところに原因があるのではなくて（それも少しは

あるだろうが）やはり現実の状況そのものによって生みだされるものであろう。

例えば昨年の暮ごろからしきりと「景気回復」ということがいわれている。確かに今年の春の賃上げ時期に大手の鉄鋼産業などは、組合がたいした闘争もしないうちに大体希望通りの額を出している。ただでさえ安い日本の労働賃金がわずかながらふえることについて、たとえその恩恵にあずからないからといって、少しも文句をいうつもりはない。だが、この「景気回復」というのが何によってもたらされたものか。考えるまでもなくヴェトナム特需がその要因だろう。伊東光晴によれば（雑誌『展望』昨年12月号）、ヴェトナム戦争によって年間約四千億ほどの需要増があったということである。ヴェトナムに対するアメリカの戦争が昨年に比べてはるかに激しくなった現在、それによる特需はふえこそすれ減るはずはない。特需にうるおう企業が「景気回復」を謳い、賃上げ要求に対してスムーズな回答を出すのもあたりまえである。

即ち、組合の「今年の春闘は楽だ」というその「楽」とは、ヴェトナム戦争の上に成立したものなのである。ここに私たちの立っている現実の基本的な矛盾が露出しているわけだが、そんなことは今にはじまったことではない。敗戦後の「驚異的な復興」も朝鮮人の血でもってなされたものだった。いわば原理的には、ヴェトナム戦争を拒否することは私たちの置かれている位置を拒否することにほかならないわけで、従ってその困難は即ち革命の困難というわけである。

だがこんな解説が一体何の役に立つというのだ。こんなタワ言を書いているくらいならゼッケンをつけて歩いた方がまだましかもしれない。だが現在の困難は、口にヴェトナム戦争反対を唱えながら、「平和」という得体の知れないものに浸っていられる点にある。石川淳はそのエッセイの中で、平和というのは状態ではなくて平和にするための努力のうちにあるというような意味のことを書いていたが、現在の状況はその「努力」が我ながら一体しているのかしていないのか漠として見定め難いというところに特徴があるのではないだろうか。

状況がこのようなものである時、私たちは大抵二つの行き方をとる。ひとつは、「努力している」と信じこんだり、自分の信条だけを表明する方法で、もうひとつは常に「原理的」に語ること、つまり現実を抽象化してその抽象的な地点だけで「急進的」にふるまうことである。これらのやり方に自足している限り、私たちは現実の中で空しく腐蝕していくだけであろう。言葉が、方法が、力が、見るまに色褪せ消滅していくところに私たちはいる。無意味だということが既に無意味であるようなところ。

だが、古典悲劇の主人公のようにしゃべるのはやめよう。「無力感」に浸るのは贅沢すぎる。魯迅が「小雑感」を書いたのは一九二七年九月二十四日、蒋介石が血の粛清といわれる「清党」を行なった時から四か月後のことだった。

私たちが無力であることは自明の理にすぎない。そして現実に対する無力は不断に「無力感」を生みだすだろう。その「無力感」を喜劇的に表現すること、そこにひとつの「活路」がありはしないか。

（67年4月18日）

日本忍法伝

第20回

作・佐々木守
え・岡本颯子

第17章 シザンの王国

(一)

今からかぞえてちょうど百二十年前の一八四六年、それは日本年号でいえば弘化三年にあたる。そのころ、わが国ではようやく幕末の風が吹きはじめ、各地に農民一揆があいつぎ、一方、黒船の来航は年とともにはげしくなっていった。水野忠邦による天保の改革は三年前にあえなく挫折し、この年、海防の詔勅が幕府にくだったのである。海外に目をむければ、アヘン戦争はようやく終結したとはいうものの、中国大陸をめぐって西欧列強の利権争いは日ましにはげしくなり、そしてフランスでは、来たるべき二月革命が、その国内的矛盾の中で着々と準備されつつあった。

一八四六年、弘化三年とはそういった年なのであった。

その年の夏、中国大陸でキリスト教の伝道にあたっていたフランスの外国伝道協会の宣教師・プリュニエールは、突如、ローマ法王に向けて「シザンの王国へ行く」との謎の手紙を送ったきり、一切の消息を断った。

プリュニエールは中国名を宝神父といったが、このプリュニエールの突然の失踪はいったい何を意味するのか誰にもわからなかった。ましてや、その最後の手紙の文字「シザンの王国」とは何なのかは、わかるべくもなかったのである。ただ、プリュニエール師は、南京から進路を北にとり、黒竜江の上流へ出て、一気にその川にそって北上しようとしたものらしいという情報がつたわったのであった。

プリュニエールはどこへいったか。「シザンの王国」とは何か! 一切は謎のまま四年がすぎた。

一八五〇年、中国において太平天国の乱が勃発したその年の夏、中国名を袁神父というやはりフランスの宣教師で貴族のヴノオー師が、四年前のプリュニエールの謎を解くため、プリュニエールの足跡をたどって黒竜江をくだった。

そのときもヴノオー師は、ローマ法王庁に、「シザンの王国を求めての旅」という手紙を送ったのである。

ヴノオーは、プリュニエールの足跡を求めつつ満洲へ入り、黒竜江をじりじりと北へ向かった。きびしい自然との闘いの中で、ヴノオーの目

はただ一つの目的「シザンの王国」にのみ向けられていた。
――が、この冒険旅行は途中で頓坐した。ヴノオーが如何にたのめども、水先案内人たちが黒竜江下流からは一メートルも先へ進もうとはしなかったからである。

ヴノオーは「シザンの王国」を見なかった！　プリュニエールは見たのであろうか。いや、プリュニエールは、実はヴノオーの進んだ地点まですら達していなかったのだ。黒竜江を下る途中、プリュニエールはこの原住民の手にかかって殺されていたのである。

プリュニエールを殺した連中――それは四十年前、日本の間宮林蔵をやはり謀殺しようとしたのと同じ民族であった。その名はギリヤークという。

かくて、「シザンの王国」という幻想は、誰にもわからないままに、幻想として葬りさられ、すべての人人から忘れられていった。

「シザン」という意味も、また、「シザンの王国」ということばの内容も、一切がゆめかまぼろしの如く消え失せたのである。

時代はうつった。二人の神父が姿を消したころ、まだ鎖国の断末魔のあえぎの中にいた日本は、やがて開国し、そして明治維新の動乱、富国強兵政策の断行と、ものすごい勢いで近代国家としての形をととのえはじめていた。そして、成長に成長を重ねた独占ブルジョアジーは、やがて市場を海外にむけはじめた。そしてついに隣の大陸・中国への進出をはかるのである。

日清戦争、日露戦争を経て一九〇六年（明治三十九年）、あの悪名高き南満洲鉄道株式会社が設立された。略称「満鉄」と呼ばれたこの会社は、中国大陸における日本独占ブルジョアジーによるファシズムの象徴として、全世界の頭にやきつけられたのである。

アメノショポショポフルパンニ
カラスノマトカラノソイテル
マテツノキポタンノパカヤロウ

これは、朝鮮からつれてこられた売春婦、俗に朝鮮ピーといわれた女たちのうたなのであるが、「マテツノキポタン」とは、つまり「満鉄の金ボタン」という意味である。

（二）

だがしかし、その悪名高き「満鉄」は五十年前、すでに人々の記憶から忘れ去られていた一つの謎を解明することにだけ役立った。すなわち、朝鮮から満洲、シベリヤに及ぼうとする巨大な土地に、徹底的収奪の根をはろうとした満鉄は、必然的にこの地域における各種群少民族の調査研究を行なわなければならなかったのだ。

満鉄弘報課が発行した「東韃紀行」はこうのべる――。

「黒竜江下流の諸民族は、一般に日本人をシザンと称した」と。

シザンとは日本であったのか。されば、「シザンの王国」とは「日本の王国」となる。それはいったい何か。フランスから来た伝道師たちがまぼろしにえがいた「王国」は日本だったのだろうか。それは何故だったのだろうか。

もし日本であったとすれば、なぜ、日本など知りもしない黒竜江下流の民族が、そこを「王国」と称したのか――。

「シザン」の意味はわかっても、その「シザンの王国」ということば

のもつ意味は依然として深い謎のままである。

「シザンの王国」――それは果たしてどこにあるのか。

（三）

胡沙吹かば
曇りもぞするみちのくの
蝦夷には見せじ
秋の夜の月

鎌倉時代初期に出された「夫木集」という歌集の中の一首である。

胡沙とは何か。それは中国大陸北方にひろがる砂漠、またはその砂漠を吹く風のことである。だが、胡沙にはもう一つの意味がある。それはアイヌ語で「息」をさすことばだというのだ。

さてここにでてくる蝦夷とは、いうまでもなくアイヌ――または、当時わが国東北地方から北海道にかけて住んでいた、大和朝廷にまつろわぬ民どもの総称であった。とすればこの胡沙の意味はアイヌの古語である「息」と解するのがいいようである。

話はちょっとそれるが、中国大陸北方にひろがる砂漠、またはそこを吹く風ということばが、どうしてアイヌの古語では「息」という意味なのであろうか。呼吸することは人間の生存にとって一番大切な行動である。その基本的な、本能的な行動を、なにゆえ、古いアイヌは、中国北方の砂漠を吹く風になぞらえたのであろうか――「シザンの王国」はどこにあるのか。

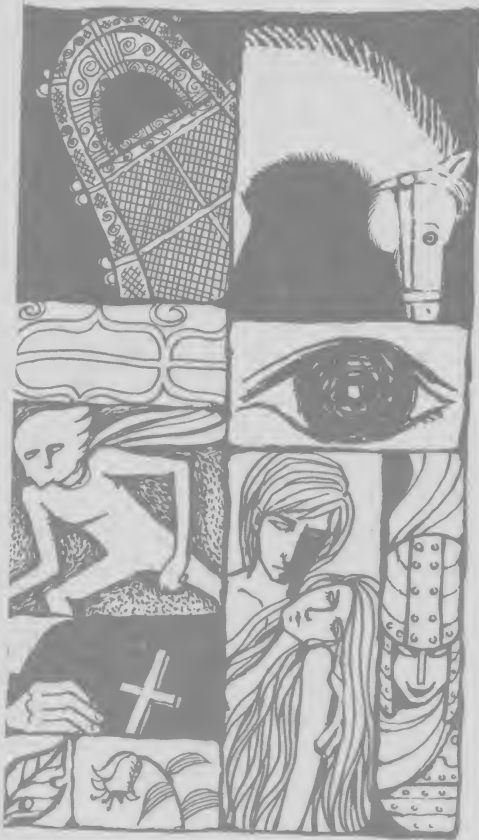
話をもどす。「胡沙」はアイヌの古語で「息」ならば、うたの意味はこうなる。――息を吹いて曇らせるときいている蝦夷には、この秋の夜の美しい月は見せまい――。

息を吹いて曇らせる――何を曇らせるのか。月を見せまいというからには、月をもおおいかくすように曇らせるということらしい。とすれば、みちのくにすむ蝦夷は、霧を吹くとでもいうのだろうか。

その答えは延文年間（一三五六～一三六〇）にかかった「諏訪大明神絵詞」に出ている。「諏訪大明神絵詞」はこのころ、信州諏訪上社の執行小坂円忠が、失われた諏訪神社の縁起再興を計ってつくった全十二巻の絵巻物なのである。だがその本体はすでに失われ、ただ「詞書」のみのこり「続群書類従」巻第七十三、および「信濃史料叢書」第三巻にみることができるのだ。

その詞書にいわく――

「蝦夷が千島といへるは我国の東北に当て大海の中央にあり日の本唐子渡党此三類各三百三十三の島に群居せり。今二島は渡党に混ず。そのうちに宇曾利鶴子州と万堂宇満伊犬といふ小島どもあり。この種類は多く奥州津軽外の浜に往来交易す。夷一把といふは六千人なり。相聚る時は百千把に及べり。日の本唐子の二類はその他外国に連なりて形体夜叉のごとく変化無窮なり。……この中に公超霧をなす術を伝へ、公遠隠形の道を得たる類しあり。戦場に臨む時は丈夫は甲冑弓矢を帯して前陣に進み婦人は後塵に随ひて木を削りて幣帛のごとくして天に向ひ誦呪の体なり。男女共に山盤経過すといふとも乗馬を用ひず。その身の軽きこと飛鳥走獣におなじ。彼らが用ふる所の箭は魚骨を鏃として毒薬をぬりわずかに皮膚に触れてその人斃れずといふ事なし」と。

これによれば蝦夷と呼ばれる民族の中には明らかに霧を吹く術、隠形の術をもったものがぁり、その身のかるさは飛ぶ鳥の如く、走る獣の如

くであったことがはっきりする。

（四）

プリュニエール、ヴノオーの二人が「シザンの王国」を求めるといってとった旅路は、何度もかいたように黒竜江にそって北へ進むみちであった。黒竜江はやがて、牡丹江を含む松花江を併せ、更にウスリー江をのんで、北上し、カラフトの北部近く、タタール海峡へ流れ出る。

「シザンの王国」とはどこにあったのか、みたびこの問いを発しつつ、二人の神父の足あとをたどるとき、我々はいやでもサハリン（樺太）へとゆきつかざるをえない。しかもその「シザン」の意味を考えれば、その樺太からつらなる北海道へと我々の足は向けられるのだ。

「シザンの王国」の謎はかくて北海道へと到達する。北海道――、江戸時代末期までそのほとんどの姿を我々からおおいかくしていたこの巨大な島に、果たして「シザンの王国」をとくカギがあるのか。北海道と樺太の持つ白いヴェールは一体何をつつみかくして来たのであろうか。

そこはまた、なにゆえ「王国」なのであろうか。

我々は、ここまで来て、もう一つ別の道からここへ迫ってみよう。いま掲げた資料すなわち「諏訪大明神絵詞」のことをもう一度思いかえしてもらいたい。なぜ「諏訪大明神絵詞」がアイヌを含む北方の民のことをかき記しているのか。信州の「諏訪神社」と、アイヌがいったいどういう関係があるのか。どうして信州諏訪神社の縁起がアイヌについて語るのか。

「ガロ」第二十九号、三十号にのった「日本忍法伝」の十五回、十六回を思いかえしてほしい。忍者・弓月と若菜が、ゆくりなくも遭遇した信州諏訪神社の奇妙なまつり。そこで弓月がきいたあの妙なる銅鐸のしらべ――。たねあかしをすれば、あの十五、十六回の、まつりのもようこそ、ぼくは「諏訪大明神絵詞」その他の資料から得たものであった。

中大兄皇子と中臣鎌足（後に藤原鎌足）による大化改新は、今までのべて来たように、騎馬民族の征服王朝である大和朝廷が、その支配権力を更に強化し、国内に残る出雲族を中心とする反権力分子を一掃するためのクーデターであったのだが、その大化改新によって中央への進出をはばまれた出雲族は、その後いったいどこへいったのか――その答えの一端のヒントを、この「諏訪大明神絵詞は」現在の我々に与えてくれているのではないだろうか。

今月号は、あえて物語の進行をとどめて、資料の列記に終始したのであるが、我々の目は「満鉄」の資料から一八四六年のフランス人神父の奇怪なことば、そして延文年間につくられた「諏訪大明神絵詞」へとさかのぼった。さらに我々はさかのぼろう。すなわち、大化改新終わったあとの日本へ。はからずも大和朝廷の正体をただ一言いったために殺された古人皇子のしかばねのそばから、我々は忍者・弓月と共に、来月からこの物語の第三部、北の国へと出発する。果たして「シンザの王国」はあるだろうか。果たして我々は「シザンの王国」に到達できるであろうか。

案内人はない。ただ、我々をいざなうのはあの銅鐸のしらべ、それのみである。

（つづく）

新人作家募集!!

「ガロ」編集部では、優秀な新人作家を募集しています。どしどしご応募下さい。

――〈作品投稿規定〉――

① 題材・テーマ・モチーフ・枚数自由。
② 作品の独創性を第一とする。
③ なるべくB3判の紙に、必ずタテ27.3cm ヨコ18.2cmに書くこと。コマ取り自由。
④ 墨汁または製図用黒インキを使用し、ウス墨やウス色はつけない。
⑤ セリフなどの文字は、エンピツで一字一字正しく読みやすく書くこと。
⑥ 締切日は設けず、到着次第「ガロ」編集部において審査する。
⑦ 入選作品は「ガロ」誌上に掲載し、原稿料を支払う。入選作品の版権は、青林堂に帰属する。
⑧ 応募原稿は一切返却しない。
⑨ 送り先は、東京都神田神保町1の55 株式会社青林堂「ガロ」編集部